

<地方行政を読む・埼玉県全般>

埼玉県知事選の総括

(2015年8月19日)

史上ワースト3位という惨憺たる投票率に終わった埼玉県知事選。全国の知事選史上最低の24.89%を僅かに上回ったものの26.63%であった。県民が自分たちの代表である知事を選ぶという重要な選挙であったにも関わらず、投票に足を運ばなかった原因は選挙への無関心なのか？

上田知事は1期目の任期にあった2004年、「埼玉県知事の在任期間に関する条例」を成立させた。同条例の第2条には、知事職に関して「連続して3期を超えて在任しないよう努める」との規定がある。つまり今回、自身が当選し4期目に突入したことによって、自ら作った条例を反故にしたのである。ゆえに、出馬に対しては多くの批判が寄せられたが上田知事は「『条例破り』というのは正確な表現ではありません。努力目標ですから」という「説明」を繰り返して、真面目に批判に答えることなく逃げ続けたのである。

多選を自粛することを、条例にして支持を得た人物が自ら条例を破る。そんな無軌道な行為は全国紙のみならず週刊誌でも大きく報じられることになった。そんな人物が4選を果たしたことによって、埼玉県は全国に恥をさらしてしまったといえるだろう。

今回の県知事選は、投票前から低い投票率になるのではないかと予測されていた。そのため、埼玉県選挙管理委員会はJR京浜東北線などの車内でCMを流したり、ネットにも広告を出して有権者に投票所へ足を運ぶよう呼びかけた。

それにも関わらず、なぜ投票率が3割に届かなかったのか？

選挙の投票率を左右するのは、立候補者たちが、どれだけ競い合っているかである。すなわち接戦になればなるほど、有権者は自分の持つ一票の重みを感じて投票所に足を運ぶようになるのである。

今回の選挙は現職の上田知事を維新の党や民主党県連などが推し、それに新人4人が挑む構図だった。けれども、埼玉県民の多くは、これを見て「あれ？」と違和感をもったのではないだろうか。そう、前回の知事選までは上田知事支持で共産党以外が相乗りするオール与党

体制だったのである。

今回、本紙でも報じてきた上田知事の様々な卑劣な行為に対して反旗を翻した自民党県連は、新たな候補者を擁立することを決めた。けれども反旗を翻してみたはものの、候補者の選定は遅れた。元総務省消防庁審議官の塚田桂祐氏は告示まで一ヶ月を切ったギリギリの時期であった。しかも、自民党本部は塚田氏の推薦を拒否。麻生太郎副首相、上川陽子法相など閣僚レベルの人物が応援に駆けつけたものの、自民党系の市町村首長には上田支持を表明する者がおり、鳩山邦夫元総務相、平沢勝栄衆院議員といった自民党所属の国会議員も応援に駆けつけた。

埼玉県の63市町村のうち上田支持を表明したのは55首長。さらに、連合埼玉をはじめとする労働団体や経済団体も支持に回ったことから圧倒的な優位は、終始変わらないまま選挙戦は続いた。

当選確実の報を受けた上田知事は、多選自粛条例を自ら破ったことに触れて「個人の心情を曲げる不名誉はあるが、県民に一定の理解を得ることはできた」と自我自賛。さらに、当選の嬉しさで口がすべったのか「相手候補の公約ビラなどを見ても、政策論争に至っていなかった。政策に関しては私が一番丁寧に県民に伝えた自信がある」と、半ばほかの立候補者を馬鹿にするような言葉を吐いたのである。（「」発言は『産経新聞』8月10日付より）

自民党県連が推す有力な対抗馬だった、塚田氏は敗戦の弁の中で「有権者の関心と呼び起こす力が私に不足していた」とし「正しいと考えたことを全力で訴えてきたが、結果は素直に受け止める。皆さんの想いを形にできず、申し訳ない」と述べた。

（「」発言は『毎日新聞』8月10日付より）

勝利に慢心して口をすべらせてしまう上田知事に対して、塚田氏はギリギリの擁立で苦しい選挙戦を強いられた末に敗北したにも関わらず。支援の中心だった自民党県連に対して恨み言のひとつもいわなかったのである。こうした小さな発言から、県知事としてコネと利権とを欲しのままにしている上田知事に対して塚田氏の清廉さが改めて際だったと考えるのは、本紙だけではないだろう。けれども、これによって上田知事は、あと4年知事の椅子にしがみついたための信任を得たといえるのだろうか？

『朝日新聞』8月10日付によれば、投票前に実施された世論調査では条例破りを「納得できる」「納得できない」の数値は拮抗したとしている。多くの埼玉県民は上田知事に「ふざけるな！」という思いを抱いているのである。

つまり、県民の多くは投票を拒否することによって上田清司知事が続投を宣言したことへのNOを意思表示したのである。すなわち、史上ワースト3位の投票率が示すのは上田県政への否定なのである。

なにしろ、今回4選を果たしたとはいえ、上田知事の得票数は20万票も減っているのである。これまで支持をしてきた20万にも及ぶ県民が上田県政の体たらくに呆れかえったことを、上田知事はどう受け止めているのであろうか？上田知事は決して「県民の支持を得た」というような世迷いごとはいえないはずである。

そして、上田県政への批判は様々なところで巻き起こってくるだろう。まず、影響を受けるのは上田知事支持を表明した首長を持つ市町村の住民だ。例えば川越市の川合市長は選挙戦において上田支持を表明するばかりか川越の選対本部長までを務めた。これまで川越市議会において自分を支持する与党の側であった自民党と対立する道を選んだのである。

川越市長選は、再来年とまだ先の話であるが、これから先の市議会で、これまでのように自民党と手を取り合って議事を運営していくという蜜月関係は崩壊していくことになるだろう。そして、その動きは県議会へも広がっていくはずだ。

今回、自民党県連は党本部の方針に反する形で、上田知事に対抗する道を選んだ。候補者選びが難航したという問題はあったが、利益誘導によって市町村の市長を手玉に取り多くの県議をも意のままに動かす、小さな独裁者となった上田知事に反旗を翻した姿勢は高く評価したい。

報道によれば、自民党県連の新藤義孝会長は「選挙でみそぎが済んだわけではない」と語気を強めている。自民党は県議会の最大会派だ。県知事選に敗北したことによって、再び何事もなかったかのように上田知事の与党として振る舞う……国政における自民党の恥知らずな姿を見て、そんな疑いを抱いていた人もいるだろう。けれども、新藤会長の発言を見ると、埼玉県自民党は相当骨太な好漢が揃っているように感じる。

県の政治は、首長と議会の両方を直接有権者が選ぶ「二元代表制」といえるシステムである。だが、ワースト3位の投票率によって上田知事が「県民の代表」というのは、まやかしの過ぎないことが明らかになった。真に県民の代表である県議会の議員。中でも引き続き上田知事との対決の道を選んだ自民党には、今後も期待したい。

しかし、上田知事の犯した「多選自粛条例」破りの県民をないがしろにした罪は大きい。上田知事のワンマン体制より生じた塩川副知事による業者への肩入れ等、利権構造の闇を暴く

大仕事が自民党県連には課せられている。県民の不快感を取り除き正常な議会を運営する前途として、自民党県連一層の奮起を促したい。

それができなければ、今回の「県政離れ」が一層進む危険性があることを、自民党県連は忘れてはならない。

本紙もまた、自民党県連が反上田を掲げたことを評価し、今後の活躍を期待しているのである。今後の県議会で、上田知事のインチキ県政を暴く上でまず争点となりそうなのが、提案される可能性が指摘されている多選自粛条例の見直しである。

自分が4選したから有名無実になったとして、上田知事が条例廃止を提案しようものなら、県民の怒りは燃え上がり上田知事に対する批判は最高潮に達するだろう。

県知事選では敗北したものの、自民党県連は投票を拒否した7割を超える県民の期待を得ているものと考えて行動して貰いたい。■